

企画 4  
FD 講演会 LGBTQ+がいることを前提とした授業づくり  
Part 1  
安全な場をつくっていくために

開催：2021 年 1 月 19 日

場所：ZOOM 開催

共催：外国語学部、FD 委員会、グローバル・コンサーン研究所

出口 真紀子

永井 萌子

出口

みなさま、こんにちは。本日は大勢の方にご参加いただき、大変嬉しく思っております。今回のFDはグローバル・コンサーン研究所、外国語学部、FD委員会の共催企画として学生と共に進めてまいりました。学びの多い時間になると思います。では、始めたいと思います。

本日はセクシュアル・マイノリティの話ではあるのですが、その前に私たち自身について振り返りたいと思います。私たちは概ねマジョリティ性とマイノリティ性の両方を持ち合わせて生きていますが、様々なアイデンティティの中でみなさまご自身のマジョリティ性・マイノリティ性をこのスライドで一度確認していただければと思います(図1)。

今日はこの中で性的指向と性自認の二つのアイデンティティを取り上げますが、性的指

### マジョリティ性・マイノリティ性

| アイデンティティ | マジョリティ                    | マイノリティ               |
|----------|---------------------------|----------------------|
| 民族・人種    | 日本人                       | 在日コリアン、アイヌ、日系ブラジル人、他 |
| ジェンダー    | 男性                        | 女性、他                 |
| 性的指向     | 異性愛者<br>(ヘテロセクシャル)        | 同性愛者、他               |
| 性自認      | シスジェンダー(身体の性と性自認が一致している人) | トランスジェンダー、他          |
| 社会階級     | 高所得者                      | 低所得者                 |
| 学歴       | 高学歴                       | 低学歴                  |
| 身体・精神    | 健常者                       | 障がい者                 |

わたしたちはマジョリティ性とマイノリティ性の両方を抱えて生きている

図1 アイデンティティをマジョリティ性・マイノリティ性に分けた例

向において異性に惹かれる人たちを異性愛者(ヘテロセクシャル)と呼び、身体の性と性自認が一致している人をシスジェンダーと呼び、この人たちをマジョリティ側と呼びます。で、同性愛者、バイセクシャル、パンセクシュアルといった人たち及びトランスジェンダー、Xジェンダー(non-binary)といった人たちがセクシュアル・マイノリティと呼ばれる方々です。ここで押さえて

おきたいポイントは、マジョリティ性を多く持っている方は多くの特権を持っているということです。特権とは、あるマジョリティ側のアイデンティティを持っていることで労な

くして得ることのできる優位性（権力も含まれる）と定義されますが、自動ドアのイメージで考えるとわかりやすいと思います。目的地に向かって歩くときに自動ドアが開いてくれるのがマジョリティ側で、開いてくれない、あるいは自力でこじ開けなくてはならない側がマイノリティ側だと言えます。

もう1点押さえておきたいポイントは学生と教員との力関係の非対称性です。教員の方が学生よりも権力を持っている。なぜなら学生の成績・修学に関する決定権があり、履修している授業以外に学生の総合的な評価に大きく影響できる権力を持っているからです。そのため、学生も教員に対しては常にこの非対称性を認識し、意識している、ということを認識する必要があるでしょう。

## 永井

それではなぜ、この話題を教員向けであるFD講演会で取り上げるのかですが、教員と学生の間にも「力関係の非対称性」があるためです。大学では教員がマジョリティであり、特権を持ちます。そのため優先的に教員へ向けた取り組みを行う必要があります。

2019年、通称パワハラ法が改正されました。そこでSOGI（性的指向と性自認）やそれにまつわるアウトティングについて言及されています。アウトティングについては後ほど学生の方から詳しい話があります。性的指向や性自認に関する軽蔑的な言動もまたハラスメントになること、「力関係の非対称性」が関わることもあることも社会的に認知され、法制化されるようになってきているということです。この流れは当然大学にも浸透されていくべきです。講演会を進めていく前にひとつ、この会の意図が、単純に教員側が常に差別者である、と訴えることではないことを留意させてください。

こちらの本（『LGBTとハラスメント』）は去年の6月に出版されたものです。この本の中で著者が経験した職場の飲み会でのワンシーンが紹介されています。「なに男同士でくっついてんだよ、気持ち悪いな〜、”ホモ”かよ（笑）」（松岡, 神谷 2020: 9）。男性職員2人に上司が放った一言です。この言葉は、同性愛者である著者の「心を突き刺し、『この場は安全ではない』」（同上）そう思わせたそうです。学生からの話にも出てきますが、残念ながら当事者はこういったことを日常的に経験します。職場に限らず、もちろん学校でも、また家族の場でも同じことが言えます。

この本では、なぜSOGIに関わるハラスメントが生じるのか、その原因として次の10点が挙げられています。もちろんこれ以外にも様々ありますが。例えば「LGBTではない＝普通」と思ってしまっているため、「うちの職場にはLGBTはいない」、この場合学校ですが、と思い込んでしまっているため、そして「LGBTのように見える」となにか特定の固定的なイメージを持っているため、などが挙げられています（松岡, 神谷 2020）。意外と思われる方もいるかもしれませんが、リストを見ると、こうした言動が必ずしも強烈的な嫌悪感情によって支えられているわけではないことがわかります。「わざわざ差別したい」と思う人は少

数派になりつつある」ものの「無意識のうちに、本人の悪気なく行われてしまう」（同上：58）ことは依然様々な場面で見受けられます。

嫌いだから、ではなく、むしろ無意識で、知らなくて、悪気なく、が多い時、出口先生の話にもあったように、特権を持っている人と持っていない人、マジョリティとマイノリティの認識が異なっているために、両者の間になんらかの認識のズレがあるために問題の言動が生じうる。しかしその多くは特権を持ったマジョリティ側の誤った認識のためであります。当事者にとっては非常に辛い経験で、差別に他なりません。ここから、まずはこのズレをなくしていくこと、何が前提になっていて、何がそうではないのか、それによって誰が周縁化されているのかを話し合い確認していくこと、これが上智大学の中で安全な場を広げていく第一歩として、必要な作業であるといえます。今回FDを通してこのような会を企画したのもこの点が根底にあります。

このような活動をしていると「本当にいるの?」、「私は会ったことがない」という反応が返ってくることが多々あります。これもまた認識のズレの一つでしょう。そのためまずは、私たちがこれから取り組んでいかなくてはならない上智大学はどのような?という疑問にお応えするため、上智大学のセクシュアル・マイノリティ学生について、実際に学生から出た声（図2参照）も含めて出口先生に話してもらいます。

## 出口

上智大学の「立場の心理学1：マジョリティの特権を考える」という授業では、毎学期セクシュアリティについて匿名アンケートを実施しています。その中で、性的マイノリティであることで困っていること、辛いことなどを自由記述で書いてもらうところから、いくつか性的マイノリティの学生の声を紹介したいと思います。

学生1は、本当の自分を隠して生きなくてはならない息苦しさや生きる価値が見出せないと書いています。学生2は、周りの人があまりにもLGBTについて知らないことから、カ

ミングアウトできない、今までの友達との関係が保てるのかと不安を感じたり、社会から否定されているように感じています。学生3は、学校などで日常的に「ホモ」「オカマ」といった差別的な言葉を聞くことが辛く、授業の課題を書く時も異性愛者を装って書いている、とのこと。こうした記述からも性的マイノリティの学生は日常の中で疎外感、孤立感、否定されているといった気持ちを持っていることがわかります。

永井

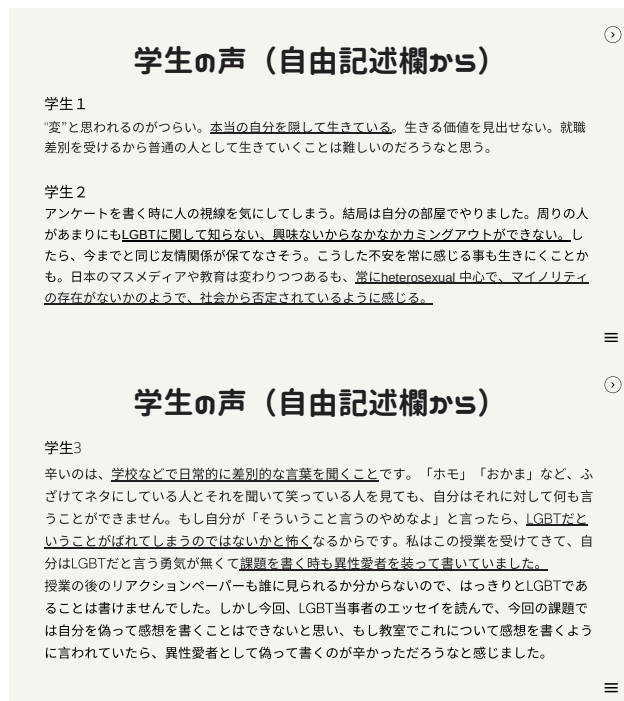


図2 学生の声

本日集まっていたいただいた皆さんはこれから安全な場を広げていくための仲間としていらしてくださったと思っています。学生からの声にもあったように、全ての学生が姿を現して上智大学の中で過ごしているわけではありません。するとですね、こうした活動を始めていく中で必ず言われることがあります。「ここ数年確かに話題ではあるけど、実際上智にいろんないの？会ったことないけど」。こうした反応が単に重い腰を上げたくないだけのものなのか、私には分かりませんが、こうした反応とも付き合っていかなければなりませんので、この発言をどう対処していけばいいのか、この人にどう理解して貰えばいいのか、最後に少しお話ししたいと思います。

何よりも先に必要なのは、現れることの難しさについて理解してもらうことです。もちろん少ないから問題にしなくていいわけでもないことは大前提ですから、この認識を共有してもらえないことには何も始まりません。ただこの発言の中に少しの希望があるとすれば「話題になっていること」は認識しているようだ、ということです。社会では問題、話題になっているのにもかかわらず、同じ問題が大学という場で現れてこないのはなぜか？こうした思考に軌道修正してあげる。これが重要だと思います。とは言え、これだけでは「じゃあなんで自分は会えないんだ」というこの人の疑問には答えてあげられていません。大学という特定の文脈の中で現れることが難しくなっている背景には2つのハードルがあります。

1点目は広い話にはなりますが「出現のハードル」です。出口先生の「自動ドアと扉」の

喩えが非常にわかりやすかったですが、異性愛者である人にとって、現れることは自動ドアで解決する話ですから、その場に異性愛者として存在することはもともとクリアしている問題です。自動ドアが開いていたことさえもわからず通過することができます。むしろ異性愛規範のために、はじめは誰もが自動的に異性愛者として存在せざるを得ない構造があります。対して、そうではない学生にとってセクシュアル・マイノリティとして現れることは自分の力で扉一枚押し開けなければならない余分な作業が入ってきます。「ここに私がいる」、「ここに当事者がいる」、こう伝えること自体にハードルが存在します。これは現状、とても勇気のいることです。もし否定的な態度を取られてしまったらどうしよう。関係が終わってしまうかもしれない。このハードルを超えることには大変な気力と体力がいります。

2点目は「立場のハードル」です。味方であるかどうかともわからない教員に伝えることにもハードルは存在します。もしかしたらLGBTQ+に対して否定的な立場をとる人かもしれない。しかもその相手が、上智大学で学業をスムーズに進めていけるかどうかの主導権を握っているとなれば尚のことです。友情関係が終わってしまうのとは全く異なる意味を持ちます。教員の発言が気になったとしても、それへの指摘が問題行動とされれば自分の立場が危うくなるかもしれない。そう思って気にしないフリをせざるを得ない学生も多くいます。こうした立場の違いによって、教員あるいは職員にとっての「会える可能性」は学生同士よりもはるかに低いです。

「現れることの難しさ」を話したのは「現れること」を正義としたいのではなく、望むときに望むような形で現れる際にはこうしたハードルが生じることをお伝えしたかったため、と理解してください。「ハードル」という言い方をしてしまうと当事者学生の一存に頼るような印象をもってしまわれるかもしれません。ですが私たちの取り組みの目的をそこに置く必要はありません。そうではなく、この講演会のテーマにもあるように「前提」を少しずつ押し拡げていく。「そうしたい」と願うときに「そうできる」。「そうする」際に、否定されたらどうしよう、攻撃されたらどうしよう、という不安、考えなくてはならないリスクを減らしていく。こういった取り組みが丁寧にされた場を拡げ、維持していくことが最優先にされるべきです。なのでこうした反応をされてしまっても、挫けることなく「それならば、誰もが出現したいときに出現できるくらいに安全な場を作っていくため、私たちはどうするか。ここから考えていきましょう」と議論を進めていっていただければと思います。

最後に、最近の状況、コロナ禍に関わる話をして終わります。授業準備やそれ以外の作業において様々な困難を教員のみなさんも経験したことと思います。研究所では今年度3つのLGBTQ+関連のイベントを開催しました。学生の活動も止まっていた中で、少しでも当事者学生をはじめとして安心できる場を提供したかったからです。当初オンラインイベントであればこれまで姿を現してしかイベントや集まりに参加できない中で、学内の活動に関わることができなかった学生にとってはむしろ好機になるのでは、という期待もありました。しかしそう簡単な話ではありませんでした。「いえ」という場所が持つ意味への考慮が

欠落していたこちらの自戒も込めて共有させてください。

冒頭で職場の飲み会でのシーンを紹介した際、こうした経験は職場、学校のみならず、家族との場でも起こりうると言いました。家族と同居する学生だけでなく、ルームシェアや学生寮といった形で他の誰かと同居する学生もいます。「いえ」にいれば学生は安全な場にいるわけではありません。「いえ」に留まっているからこそ、パソコンや携帯に向かってする発言が他の誰かに聞かれるかもしれない不安がつきまといます。このために十分な参加がかなわない学生もいました。これを受けて私たちはビデオをオフ・オフの選択だけでなく、チャット機能をフルに活用したイベント作りを意識するようになりました。

教員の皆さんも、授業中だけでなく、面談などで学生とお話する機会が多くあると思います。そういう時、ルームに他の人がいないければ安全な場、なのではなく、その相手が今どういった環境にいるのかにも十分に配慮してもらいたいです。まずは本人の意思を確認し、必要であれば、ズームであればチャット機能がありますし、メールでもできると思います。特定の話題は筆談に切り替えて対応していくこともまた安全な場を広げることの一端になります。とは言えこちらはまだ方法を模索中です。これからこういったことも含めてお互いに情報共有できる機会を継続的に作っていければと思います。

#### 参考文献

神谷悠一, 松岡宗嗣. 2020. 「LGBT とハラスメント」 集英社.

## Part 2

### セクシュアル・マイノリティ当事者による大学での経験

学内サークル くまのみ

学生団体 クツシタカラ



図1 当日資料より一部抜粋

## Part 2 LGBTQ+がいることを前提とした授業のために

鈴木 茂義

公立小学校非常勤講師。上智大学文学部非常勤講師。自治体の相談員。専門は特別支援教育、教育相談、教育カウンセリングなど。文教大学教育学部卒。14年間の正規小学校教諭として勤務を経て現職。教員19年目。教育研究会や教育センターでの講師経験も多い。オープンリーゲイとして、学校に勤務しながらLGBTや教育に関する講演活動を行い、性の多様性やより良い「生き方」「在り方」について参加者と共に考えている。

学生の皆さん、発表お疲れ様でした。自分自身が大学生だったときのことを考えると、大学の先生方とこのような話し合いを持てたということが素晴らしいですし、皆さんが自分の意見を発表できたことというのは本当にすごい価値があると思います。これまできっと、ドキドキした部分もあったかもしれませんが、皆さんの行動が大学をより良い方向に進めていくのではないかなと思っております。本当に純粋に、聴きながら感動しました。よろしくをお願いします。今日はLGBTQ+がいることを前提とした授業作りということで、進めていきます。この時間が、いろんなことを知ったり感じていただいたり考える時間、そのきっかけになればと思います。

今日は多様性の話をすることにもなると思いますが、多様性とは一体なんでしょうか。私自身は、二つの視点で考えています。一つは、社会の中には色々な人がいるということで、社会の人々と多様性という視点があります。もう一つは、社会の中には色々な人がいる、社会の中には色々な人が暮らしているということだけではなく、私たち一人一人の中にも多様性というものは存在しているのではないかなというふうに思います。私たちは一つの事柄だけで自分自身が成り立っているわけではないです。言い換えると、私の中の多様性、それは、多様性ではなく、多層性とも言えるかもしれません。これは、スイーツのミルフィーユのようなものを想像していただけるとわかりやすいかもしれません。私たちは、外から見えても見えなくても色々な層が重なっていることによって、一人の人間ができていないかなと思います。

この多層性は、外から見てわかる部分と、そしてフォークで中を切るまで、中身をこう開けてみないとわからない部分があります。その中で人と違う部分とか自分だけが持っている特性のようなものもあります。見た目の性別とか容姿とか身体的な障害があるかないかということは割と見えやすい違いかもしれませんが。逆に見えにくい違いのようなものは、大



切にしている宗教とか価値観とか出身地とか発達の違い、グラデーションみたいなものがあります。LGBTQ+に関することといえば、この性自認とか性的指向という部分が外から見えにくい違いです。ダイレクトにLGBTQ+について書いているわけではありませんが、人気の絵本作家、ヨシタケシンスケさんの「みえるとかみえないとか」。この絵本もそういった見える違い、見えない違いについて言及しているように感じます。

もう一つの視点として、社会の中の多様性ではなくて、個人の中にも多様性があるんだよという部分を私自身は大切にしています。そう考えると、多様性に当てはまらない人というのはいるのでしょうか。いないですよ。全ての人が多様な社会の中で暮らしていて、一人一人がそれを構成しているわけです。結局、人は皆お互い様なわけです。LGBTQ+の話が、遠い国の話ではなく、何かしらご自身にも近いところの話として捉えていただけたら幸いです。社会の中の多様性と個人の中の多様性ということでお話ししていきたいと思います。

改めまして自己紹介させてください。自分自身がゲイというと、私の全てがゲイで形作られているようにイメージされるんですけど、決してそんなことはありません。恋愛対象は男性というところが少し人と違う部分ですが、私の中にも色々な多層性があります。LGBTQ+の話をすると、性というものが話題になりやすいです。この話題も、とにかくこうベッドの上の話でしょうとか、エッチな話でしょうとか、なりやすいんですけども、そうではありません。この「性」という漢字、分解すると左側の「忄（りっしんべん）」に「生きる」に分解できます。この「忄（りっしんべん）」の意味を調べてみました。すると「忄（りっしんべん）」は心を表しているそうです。ですので、「心が生きる」とか「心とともに生きる」なんていうふうにも捉えられます。当然、ベッドの上の話でもあります。やはり生き方とか自分自身が社会の中でどうあるかとか、あり方の話にも繋がってくると思います。

まさか私自身も小学校の教員、そして担任を持っている立場で、子どもや同僚、保護者の前で自分自身のセクシュアリティをオープンにする時代が来るとは全く想像していませんでした。社会的な抑圧が強い中で、自分自身がゲイであることをオープンにすることによって、職場の中での心理的な安全性が担保されないなというのは、かなり早い段階から感じていました。私の場合、自分自身が同性に引かれると、実はもう小学校1年生のときにはそう感じていましたが、その気づきから自分自身がゲイであるということは決して人に言うことはできないなと思いました。社会人になって少しずつ周りの人間関係や環境に恵まれる中で、この人だったら自分自身のセクシュアリティを伝えても絶対に傷つけられることはないだろう、という人に目星をつけて、ちょっとずつカミングアウトしていきました。

ですが教員をやりながら壁にぶち当たることになりました。今から数年前ですが、ちょうど小学校5年生・6年生を担当していました。けっこうやんちゃな子どもたちで、学級経営に苦戦していました。そんな子どもたちに対して「素直であれ」とか「誠実であれ」、「正しく生きろ」と、かなり口うるさく説教していました。ここで大きな自己矛盾を感じるようになりました。子どもたちに対して「素直であれ」、「誠実であれ」と言っているのにもかかわ

らず、自分自身の中には非常に大きな隠し事がある。要するに、子どもたちに言っていることと、自分自身のあり方が一致していないということで、すごく悩むようになりました。

子どもたちの前でもカミングアウトしたい、だけどそれは怖くてできない。怖くてできないけれど、この子どもたちと対峙するためには自分自身もオープンでいたい。そんなときにあるプロジェクトと出会いました。それが、社会で生活している LGBTQ+の当事者の人たちの可視化を目指す「OUT IN JAPAN」という NPO 法人が企画していた写真のプロジェクトでした。世界的に有名なカメラマンのレスリー・キーさんに写真を撮っていただいて、それをインターネット上で公開するというプロジェクトでした。カメラの被写体になっている方は全て LGBTQ の当事者の方です。実際に私もレスリー・キーに写真を撮っていただきました。

子どもたちは立派に卒業して行って、ただし私自身はカミングアウトする際に担任をしながら教員を続けるというのは難しいということで、一度、退職の道を選びました。自分自身の中の一番大きな隠し事である、ゲイであることをオープンにしたので、私は人生バラ色になると思っていました。かなり生きやすくなった部分はありましたが、バラ色にはなりませんでした。やっぱり個人の努力だけでは限界だなと思いました。

LGBTQ+の当事者がカミングアウトという方法でなんとか道を切り開くだけではなくて、やはり法律で枠組みとか制度とか、あとはその組織の中の雰囲気のようなものが醸成されることが必要なんだろうと思います。先ほど学生さんのお話の中でもルール作りということが色々ところで出てきましたが、やはりこういったものが整うことによって、当事者の学生さんたちの安心安全、そして先生方の安心安全も、少しずつ保証されていくのではないかと思います。どうしてもマイノリティの話になると、思いやりとか優しさという話になりがちで、当然そういった人権的な配慮は必要ですが、やはり枠組み、そういったものを整えていく、そちらの方も重要です。人権意識という部分と制度設計という、その両輪で、レベルアップしていくものだと思います。

そう考えると、LGBTQ+の私自身も、そしていわゆるセクシュアルマジョリティといわれる皆さんも、どっちかが特別でどちらかが特別でないというわけではなく、私たちはすでに多様です。私たちの性のあり方も、当事者の人もそうでない人も実はすでにもう多様な性を生きる一人一人です。そういった意味で、ご自分事として捉えていただけることもできるのではないのでしょうか。金子みすゞさんの詩の中に「みんなちがって みんないいい」という言葉がありますが、それは性の多様性に関しても同じことが言えます。

世の中の動き、自治体の同性パートナーシップの制度が 2015 年の東京都世田谷区、そして東京都渋谷区を皮切りにスタートしました。2019 年 10 月の段階では 26 の自治体で同性パートナーシップの制度が始まっています。昨年は、60 の自治体まで広がりました。2020 年 12 月 21 日のものが最新ですが、69 の自治体まで広がっています。同性パートナーシップの制度を導入している自治体の総人口を計算すると、日本全国のほぼ 3 分の 1 の自治体

で同性パートナーシップの制度が導入されてることになります。人口比のカバーですね。かなり大きな広がりを見せてきています。

授業の中で同性婚が取り上げられるという話もありましたが、それについての意識調査です。そもそも同性婚に賛成ですか、反対ですかという質問自体がナンセンスという声もありますが、調査の一つとして2015年の段階では「賛成」、「やや賛成」が51.2%。そこから4年経って、色々な制度や理解の広まりとともにそれが増えました。また、性的マイノリティに対するいじめ・差別禁止の法制化・条例下に賛成する方に関しては9割近くまで「賛成」というふうに答えています。当事者の人だけではなくその当事者にいる周りの人たちも、必要なものだと意識が変わってきています。

事前に学生の皆さんと打ち合わせをしたわけではないですが、学生の皆さんが伝えたいことと、当事者の教員である私が皆さんと考えたいことは、ほとんど同じでした。それだけ私たち当事者の人たちの生きづらさみたいなものがまだ共有されている段階なんだと思います。同性パートナーシップの制度が広がりを見せているとはいえ、具体的な場面の中での生活の中での困難さというところは、もしかしたら解消しきれてない部分もあるのかもしれない。そういった意味でも、今回このような研修が行われたということは、当事者の人も、そして先生方も、より良い方向に行ける、繋いでいくためにはどうしたら良いかという本当に最初のスタートラインに立つことができたのではないかなと思います。前提条件として学生の皆さんも仰っていたように、当事者の学生はいないのではなく、見えていないだけです。また、LGBTQ+の人に対してポジティブな言動をできる人を、アライアンスを省略したものでアライというふうに呼びますが、その味方になってくれるアライの学生もアライの先生たちも実は私たちからすると見えていないだけ、見えにくいなという部分があります。本当は力になってくれる人は学内にたくさんいるんですけども、その人たちを見つけていくところがあるのだと思います。

これは私自身も反省しているところなのですが、やはり人は無意識の偏見から逃れることはできないのだと思っています。私自身の中には偏見がないのかというと、私の中にもちゃんと偏見があるんですね。色々ところで話していますが、以前、混み合っている地下鉄の中にベビーカーを押したお母さんが乗ってきたことがありました。その瞬間、ちょっとイライラしてしまいました。こういうLGBTQ+に関する啓発の活動をしているのにもかかわらず、そういう感情を持ってしまった自分自身に対して非常に驚きました。自分は差別・偏見ないんですと言っていたのですが、それは違うなと思いました。自分の持っている偏見に対して無意識であっただけでした。

先ほど学生さんの話の中にも何か不適切な問題があったとき、私自身も未だに間違えるときはありますが、これはちょっといけなかったなというときは、謝ったり、後で謝罪したり、次からこういうふうにしますということが出来るかなと思います。私自身も日々学校で授業をしながら、子どもに色々なことを指摘することがあります。私自身も何か自分が間違

ったときに相手に対して謝れる先生でありたいなと思っています。私自身も子どもによく謝るんですけど、子どもに対して謝ると、子どもがびっくりするときがあるんですね。ある子どもからは「学校の先生も謝ることがあるんですね」と言われたことがあるんですね。それを聞いたとき、そもそも学校の先生と生徒の間には、かなり厳しい上下関係が存在しているのだと私自身も気付かされました。

あと、やはりルールとか枠組みが必要になってきます。ルール作り、枠組み作りをしている大学は、例えば早稲田大学の「ジェンダー・スチューデントセンター (GS センター)」のようなところ、あとルール作りという部分では筑波大学の取り組みが参考になります。既にあるものを活用しながら、上智大学の実態にあったものを学生の皆さんと一緒に作っていくといいです。思いやりだけで人権は守れないっていうのは、他のマイノリティに関しても同じです。

これは先ほどの私自身の無意識の偏見と重なるところがあるのですが、差別的な感情と差別的な言動は分けて考えていいのではないかと思います (心理カウンセラーの村上裕さんのお言葉です)。私自身も無知であったり、まだ知識が足りなかったりすることによって差別的な言動をする可能性は非常にあるわけです。ですが、自分自身の中で何か言葉とか行動を間違えてしまうかもしれないという、その気持ちがストッパーになっていて、誰かを傷つけてしまう言動はしないようにしています。本当は自分の感情的なもの、心の気持ちとしても、差別的な気持ちを一切持たない自分になりたいなとは当然思っているんですが、私の場合はその差別的な感情をゼロにするのは今のところちょっと難しそうだなと思っています。だからこそ、差別的な感情が差別的な言動に繋がらないように、自分の行動、そして自分の言葉だけは、コントロールしていきたいと思っています。

定期的知る機会を設定するというのも、良い方法だと思います。上智大学には学生のグループもありますので、その存在は大変貴重です。年に1回でも2回でも3回でも、定期的に学生の皆さんと忌憚のない意見を交流することによって、そして学生の皆さんも先生方の本音を知ることによって、お互いにじゃあ次はどういうことをアクションとして起こしていこうかという話ができるのではないのでしょうか。

ここまで、色々とお話ししてきました。色々な場所でお話しさせていただくたびに、最後いつもこの話で締めています。真の自立とは何でしょうというお話をしたとき、メディアでもよく登場なさるんですけど、真の自立とは依存先を増やすことである、真の自立とは依存先を増やすことというふうに、東京大学先端科学技術センターの熊谷晋一郎先生が仰っています。熊谷先生ご自身も車いすユーザーの当事者で、大学で当事者研究をやっている方です。これからの時代は、自分一人の力で何から何まで頑張るだけではなく、頼れる先とか安心できる居場所、これをどんどん増やしていくことが、今後の世の中を渡り歩いていくために必要ではないかなということを投げかけてくれているような気がします。

まさに上智大学という場所、そして一つ一つの授業が、安心安全な依存先になるように、

そして先生方にとっても学生の皆さんにとっても大学という場所が安心安全の依存先の一つとなるように、なっていくことを願っております。私自身も色々なご縁があって、上智大学の文学部の方で、共生社会とスポーツをテーマに授業を持たせていただいています。私も大学の何かお役に立てることがあれば力を発揮したいと思いますので、また色々なところでお話を直接できる機会があればいいなと思っております。

## 講演会全体に関する質疑応答

### 鈴木

学生の皆さんからお話がありましたが、何だか大変なことになってしまいそうだなと思わなくて大丈夫です。どうしてもこの話題を提供すると、何だかもう大変だからちょっと距離を取った方がいいのではないかとと思われる方がいらっしゃるようですが、コミュニケーションの減退に繋がっては、本当にもったいないです。なので、私たちの中にも色々な気持ちの揺れとか気持ちの戸惑いみたいなものが生まれる、生まれている可能性もあると思いますので、まずはそういった戸惑いとか揺れみたいなのも一度みんなで広げてみて、それぞれの人がどんなことを感じたのかというのを共有する場を継続して持っていけるといいなと思っております。鈴木に対する質問は何でも答えますので、遠慮なく聞いていただければと思います。

### 質問 1

私は、以前、外国語、カンボジア語を教えていたことがありました。今からもう 10 年以上前の話ですが、カンボジア語で自分が返事をするときに、女性と男性という使い分けがあります。返事の仕方が違うのですが、授業が終わった後に、ある学生から個人的に質問があって、そういう場合どうすればいいのかという質問で、私はそのとき好きな方でいいですよ、という答えをしてしまったんです。実は何回か他の学生からも質問がありましたが、それ以上、そういう質問をくれた学生と深く話したことは実はなかったんです。非常に個別の問題ですが、そのときにどういうふうに答えたりすると良かったのかなと。もし外国語の受け答えの話だけでなく、もう少し広くても良いので、何かお考えとか対応を聞かせていただけたら嬉しいです。

### 鈴木

先生のご対応は正解だったのではないかなというふうに私は思います。その学生に選択肢を与えた、選択の余地を与えたということで、それは一つ良かったのではないかなというふうに思います。例えばもう一歩進めたときには、男女別による言葉の使い方の違い、その文化がある中で、こういうルールとか慣習とか、文化はあるんだけど、自分で何かあれば選んでいいよ、みたいなことを最初の段階から全体に対して伝えていくと、その中で個別の対応をする前に、先生からそういう方針を示すことで、学生の方で何か選択しやすくなるというものがあるのかもしれないなというふうに感じました。いかがでしょうか。

### 質問者

そうですね、わかりました。確かに違う学年で何回も聞かれたのに、私はそれを学習して

ませんでした。確かに最初そう言ってあげれば良かったですね。色んな人がいるっていうことを前提で理解したならば。よくわかりました。ありがとうございました。

#### 鈴木

私も、小学校で子どもに対してどうしても、男の子に対して「くん」、女の子に対して「ちゃん」と呼んでしまう癖がどうしても抜けきらないんですけれども、最近は授業開きのときに、「しげ先生は皆さんを『さん』付けで呼びます。ただし、個別に他のもっと自分と呼んでほしい呼び方がある場合は、それに応えたいと思いますので、声をかけてください。」というようにしています。

#### 質問 2

日本語で学生を指名するときに、男性でも女性でも、「さん」と呼ぶという手段がありますが、英語で「Mr.」とも「Ms.」とも呼ばずに指名する方法はあるのでしょうか。LGBTQの人はどう呼んでもらいたいのでしょうか。(チャットからの質問)

#### 鈴木

自分を表す言葉で、男性とも女性ともカテゴライズしない呼び方が最近出始めたというのを聞いたことあるので、私の方でも一回ちょっと調べてみたいと思います。あとこれは情報提供なんですけれども、最近、日本航空さんは機内のアナウンスのときに、今まで「ladies and gentlemen」っていうアナウンスから情報の提供を始めていたんですけど、それを廃止したというのがこの前ニュースでありました。「ladies and gentlemen」ではなく「all passengers」という言い方で対応しているという、そんな企業の取り組みもあるというところまで、ご紹介したいと思います。

#### 質問 3

私は保健体育研究室で教員をしています。スポーツでは、大前提として性別二元論、男か女かっていうところが頻繁に出てきます。特に私は女性スポーツ・医学というのを専門分野にしている、ジェンダーとは切り離しつつ、女性の体、女性ホルモンの影響であったり、女性の体を医学的にか、生理学的にかという話をすることが多いです。多様性のことに配慮しつつ、ただ冠として「女性の」とか「男性の」ということから切り込んでいきがちです。差別的な表現にならないように、そういったことに言及しないようにと配慮をしてるつもりでも、どこからは切ってよくて、どこからは社会的に切り離せないからみたいなのに、常に迷いがある。当事者の方から、スポーツとか体育の場で、どんな場で居心地の悪さとか、そういうのを感じることもあるのかみたいなお話を伺いたいと思います。

#### 学生 A

私が保健体育などの授業で辛かったこととしては、中学高校の保健体育の教科書には必ず思春期になると異性への関心が高まります、って書いてあったのが、すごくモヤモヤしました。多様な性が前提としてあるんだよっていうスタンスをまず示していただければ、特にその体の中のことについて言われるのは問題ないかなと思っていて。例えば、女性の体の中はこういう構造になっていますって言い方はしても全然大丈夫なんですけど、そもそも性自認と身体的な性は分けて考える必要があるよ、とまず授業の前提で言ったりですか。配慮してくださってるんだってというのが伝われば、「あ、先生は、こういうふうを考えてくださってるから」と学生も思えるので、それが安心に繋がるかなと、私は思います。

#### 質問3 チャットから

似ているかもしれませんが、授業中に実技の中で男女別にわけたり、授業中に更衣室が男女に別れていますが、そのあたりはどう思っていますか。

#### 学生 B

そうですね、別れているのは問題かなと思っています。率直な意見ですけど、例えばトイレで着替えるだったりとか、私はけっこうしんどいなって思う時もあったので。それに対してどういった配慮ができるかというのは、私はその学校の仕組みを詳しく知っているわけではないので分からないんですが、そういった経験をしました。

#### 学生 C

更衣室を分けるとか、トイレを男女別で分けるっていうのは、やっぱり必要なのかなと思っていて、やはり安心安全っていう面から必要とされていると思います。一方で、例えば男子トイレ・男子更衣室に入るっていうことに抵抗がある人もいます。実際に、私が LGBT サークルに入っていて、そういった思いをしている人も知っているので、そういったことを考えると、例えば、ジェンダーニュートラルな更衣室だったりトイレを設けることとか、そういった配慮は今、必要とされているのかなって思います。

#### 鈴木

更衣室やトイレが男子・女子って別れているのは、本当に幼稚園、小学校、保育園からなので、私自身もこういう活動をしながら、そういう環境で子どもたちを学ばせていることに非常に大きな違和感と矛盾を感じながら日々過ごしています。一つの方法としては、LGBTQ+の学生を狙い打ちにして、こういう更衣室を用意しましょう、とか、こういうトイレを用意しましょう、ということだけではなくて、インクルーシブな多目的トイレ、多目的な更衣室みたいなものが、一つか二つ、本当はもっと広がるといいです。選択肢の幅が二つ



から三つに広がることによって、LGBTQ+の学生を狙い打ちにしない、他の人たちも使えるような、そんなものが出てくる、そんなものを設備として整えていくことが大事なというふうに思います。

あともう一つ、先ほど先生が仰っていた LGBTQ+とスポーツということに関して、当事者の人からすると、スポーツ界というのは最後の砦というふうに言われています。それくらい男らしさの規範とか・女らしさの規範みたいなものが非常に強いので、そういったところをどうポジティブに打開していくかみたいな話もトピックとして上がっています。実は昨年12月に、東京の新宿区新宿御苑前に LGBTQ についてのポジティブな情報発信をする大型の常設施設が誕生しました。プライドハウス東京レガシーというところです。そこでは LGBTQ とスポーツということにもポジティブな情報発信をしていますので、そちらの方も一度調べていただけたらと思います。私もそこで今、運営スタッフをしておりますので、施設の見学なども可能ですので、ぜひいらしていただければと思います。

#### 永井

この狙い打ちをしないというのは、私もすごく同感することとか、セクシュアルマイノリティの学生団体とかでも部室というのを持たないというのも一つ、その部室に入ることによって特定されてしまって、アウティングに繋がってしまう危険性があったり、飲み会もキャンパス一人ずつ出るようにというルールを持っている他大学の学生団体もあるということを知ったことがあるので、狙い打ちをしないというのは重要なポイントだと思います。

#### 質問4

イスパニア語やフランス語など、女性名詞・男性名詞・中性名詞など、文法の基本の『き』を教えるときに、当然のように出てくるのですが、文法用語として説明する場合には、当事者の方には違和感はなく響くのでしょうか。

#### 学生D

私自身も外国語学部なので、女性名詞・男性名詞を使います。それに対して先生に「自分はノンバイナリーだと思っているので、どういうふうに使えばいいですか」と質問したところ、回答は得られなかったんですね。分からないと。ネイティブの方にも聞いた際も、一応あるけど、あんまり使われていないと言われてしまって。なので、私の言語の場合、ないと考えの方が現実的かなと思っています。他の言語だったら、あったりするのは聞いたことがあります。私も、「あなたは女性だ」みたいな感じのことをレポートで書かれたことがあります。なので、それはその都度言わなければいけないのかって思ったりもしたりしたので、まだ全然自分の中で回答は得られていないんですけども、そういった経験があります。

**質問5**

福武と申します。総合グローバル学部の教員です。そして今年度、学生センター長の職責を預かっております。本日は大変貴重な、ためになるお話をありがとうございました。学生センターとしてもインクルーシブな大学教育関係、学生生活環境に取り組んでおりますけれども、今日のお話を参考にして、さらに取り組んでいきたいと思っておりますので、今後とも色々ご助言いただければと思っております。私自身も調べてみたいと思うんですけども、今日鈴木先生のお話で、早稲田大学と筑波大学でのルール作りを参考にしたら良いのではないのかというお話がありまして、上智大学としてもぜひルール作りということで、遅れがあるようであれば取り組んでいきたいなと思っておりますので、簡単で結構ですので、早稲田大学や筑波大学のルール作りにおけるポイントのようなことで、ご存知のことがあれば、ぜひ教えてください。

**鈴木**

ルール作りや制度設計をしていくとき、当事者の人たちを置き去りにしないで、当事者の学生の皆さん、当事者の教職員の皆さんに積極的に参画していただくというのが大切かなというふうに思います。ただしルール作りに参画していただくときに、誰かに対して自分自身が当事者であるということをオープンにする危険性もあるので、例えば自分のセクシュアリティをオープンにした方がいいのか、自分のセクシュアリティをオープンにしなくても、アライの立場としてルール作りに参画できるのか、そのあたりを検討すると良いかなと思います。学生や教職員の中でも、あえてカミングアウトした上で、自分の存在を分かった上で、ルール作りに参画したいという人。ルール作りには参画したいんだけど、自分のセクシュアリティはオープンにしたくないという人もいます。そのどちらも受け入れられるような会が設けられると良いかなというふうに思っています。